「情報知識学思案―起章・承章――Why？　&　Then！」　　村上　茂三

(Some Image of Information and Knowledge Science　　Shigezo MURAKAMI)

Our tentative image of Information and Knowledge Science is proposed.
New paradigm is based on the Japanese Civilization.

◎情報知識学という「新しい学術」は、益々、複雑化し乱脈化する近未来社会を、楽しく明るいものにする為の「ひとつのガイド」に成り得ると、堅く信じつゝ思いを巡らして居ります。

思索半にて失礼とは存知つゝも、終着が見えぬ程に自侭に迷走して参りました大筋を報告申し上げる決心を致しました。各要項を複眼的視点から検討しているのですが、記述・口述は直線的である為、加えて貧困な文章技術の為に、御判り難い悪文となっております。御詫び申し上げます。然しながら、心を込めて上申致しますので御汲取り下さいますよう。其上にて、諸兄姉におかれましては、厳しく御検査、御指導下さいます様お願い申し上げます。更なる検討をより的確なものにさせて戴き度存知ております。

◎今回、問題提起として、＜起章・承章＞を説明申し上げますが、その後＜転＞じて導く予定の＜結論＞の一部も関連部分に挿入させて戴きますので、暫定的に御批判下さい。

＜起章＞…「新情報知識学」とはどんなものか？：“WHAT？”　は如何にも見透し難い。
　　：力強い姿が見えない！　：多分、シーヅベースの発生では無い為か？

1．「情報知識学・学会」新興に欣喜雀躍。諸賢のご労苦を拝謝。

2．情報知識学の成熟度：目下、草創期…悠々自在に成長しているが如く…恐悦至極。
（具体的課題研究が精力的に進展。）（体系作りは百家争鳴・試みの段階か…と拝察。）
（但、「新学」として、世間から充分な認知を受ける迄には至っていないと推測致す次第。
「新学会」として公式認定された慶事は、流石、大先輩先生方の御先達の御蔭と感服。）
（本来、『各人、自由なる一学』。然し、輪郭的な意味で枠組みが設定されて然るべきか。）
（「設立趣意書」、「米田初代会長の御挨拶」など多彩な御高見を照応させて戴いて思量。）

＜結＞「試案を起こす縁」として、一応、新学の基調(Ver.1.0)を次の様に纏めて見ました。

①データ・知識・情報の本質に係る理解、即、情報科学・情報工学の対象以前の諸課題に関する研究の推進。及び、交流の場の設立。
　＜結＞⇒５．④項、　６．④項

②学問体系の確立と具体的な問題解決。

③具体的な課題の例が提案されている。

④その他諸々、大事な事。

⑤当然の前提として、「既存の学、既存の学会では、取り上げられ難い問題を安心して研究し、話題にして貰える様な場」を設定するのが枠組みのひとつ。　＞

（ところが、「本仕様に合う新科学は一体、どんな内容か？」は相当な難題であります。）
（現時点では「何処へ着地するか？」よりも「どの方角へ飛び立つか？」が大切であろうかと観じて居ります。つまり我々の責任は first runner の其れであるよりも、寧ろ "pathfinder" としての責務であろうかと存じ居ります。）

3．諸兄姉による「新学・情報知識学創成・体系作り」の多大な御努力に敬服致します。
（就中、前記米田先生の御高説、学会設立趣意書、藤原譲先生の「情報知識学のフロンティア」、藤原鎮男先生の「会長就任御挨拶」、平田周所長の「情報学の体系試案（共同研究課題）」等、その他　IKN 所載の多岐分野に亘る会員諸賢の御高見に依りイメージが浮き彫りにされつゝあります。何時も啓蒙される事ばかりです。）
4．只、全体像が不可測である為、「情報知識学の場で仕事をしている気持ち」は実感出来るが、新学から「何かを汲取る事が出来ないもどかしさ」が残ることも事実。
（体系を整備すれば…？。それで落着しそうにも無い。体系付けられる中味の問題か。）
（思案の果てに辿り着いた要諦：提案する新価値観に sympathy を得る活路の開拓。）

＜結＞此処では、一応、「新学」とは諸学の rearrange　等による新体系の創成に止まる事なく「新価値観・新パラダイム」に立脚する学術と定義させて頂きます。＞

＜結＞世に新学を送り出す時の戦術のポイントとして、提案する新価値観が人々に受容れられ易い様に、sympathy を得る工夫を忘れ無い様にする。＞⇒4．②

①由来、我々は或る程度完成された体系の中での仕事に馴染んでいます。所が、此度の仕事は新価値を創出しながら、其の上に建つ新体系構築と、新解釈による現実問題究明という三者同時併行型の研究と言えましょう。しかも、後二者に比較して前者は先行させらるべき関係にありましょう。此点が、当面する「新学創成」手法の基底に潜在する「不慣れな範疇の仕事」に当るのではないかと思い始めました。
所詮、「辛気臭い出発点」から発想して行く勇断が必要なのでしょうか。。

②此処で「日本文化・風土・大和心」に関連しておさらいさせて頂きます。
遠い昔から、概ね、我々は、国外で既に基盤（価値観を含む論理体系）が作り上げられた学問（近代科学に限定せずとも）を移入し、其の学問パラダイムを尊重して飛躍発展させ、国内外に還元し、人類全体に寄与するパターンを得意として来た様に言われて居ります。独立ではなく、孤立性の強い風景です。

例えば、S.P.HUNTINGTON 先生は、学術のみならず政治、経済面においても「祖先から受継いだ民族のアイデンティティとしての日本文化の特長」であると見做されております。 此は取りも直さず「新学国産は至難！」を意味しましょう。
歴史事情は、独創的学問が創始されはするものの、「島国の人々」に依って認知される段階で、甚だ険しい山並みに出くわす事を教えて呉れます。
同国人への対応と異国人への対応が異なる心情に基づいているようです。

＜結＞「島国暮し文明」は、「荒野暮し文明」に比べて、根源的美徳として豊かな協調性が挙げられています。反面、「島国風土の底流」のひとつに、一億総中流や、出る杭は打たれる式の「平等基調・差異減殺」が在り、個々人の思考様式や生活様式（ここで言う文化レベルの問題）に圧力が加わっていると思われます。そのエネルギー源は「嫉妬」であると分析しているひとがいます。仮令、其れが創造性であっても、突出することは許され難いのだと見ています。従って、「国産新学」を誕生させる為には、或程度迄は、人々をして『実は、俺も、其れは考えて居た。』と言わせる寛容さが、密かに用意されねばならないと信じております。尤も、Open Heart であると言われている欧米においてでさえも、時には、「Not Invented Here!」では駄目な場合があると聞いております。 ＞

＜結＞新学に対するニーヅが、特殊な専門的な表現でなく、独創的ではあっても、本音を語る一般賛意を得易い構造にする。他方、シーヅは独創的新規性・特異性・専門性が眼目でありましょう。つまり、ニーヅベースの組立ては、「アマチュア的」が良いと思っています。⇒５．②③項

◎ここで言うアマチュアは、未熟な素人という意味ではありません。
“ Amateur” ： One who is fond of .
： One who cultivates a thing as a pastime.(COD)
◎５年前に開始された「顔学会」の例は示唆に富みます。異なる専門家の間の交流は「知ることを好むアマチュアの精神」で運営されているそうです。

③さて、当学においては、勿論「来るべき時代の最も重要な科学」であるとの認識の元、多分野の練達の専門家が本学会で協業する訳です。故に「精髄が組上げられ傑作が構築される事」は間違ありません。ですから、勘所は「島国の人々」の賛意を滑らかに獲得する舞台作りではないかと考えて居ります。何故ならば、人は誰でも新しいパラダイムを受容れる時に、何らかの「イニシエーション」を必要とするからです。「海外で或る程度開発された学問」が、多くの場合、我が風土に根付き易

いのは、所詮「唐様・舶来」という事情がイニシエーションを「積極的に受容れる」契機として働くのではないかと解釈しております。

④見方を変えれば、知識の問題も然る事ながら、課題は「エイドスの領域」に関るものであると言えましょう。

＜結＞一方、「超情報化社会」を前にして諸情報関連学術は「自己省察」、「前提公理照顧」に迫られているのだと思っています。いわく、「これから、世間はどうなって行くのだろう？」等など。其のニュアンスでも、情報科学以前の考察や、研究目的・エイドス如何？　が係って来ます。そこで、戦略のポイントを此処に置くことにしました！　　＞

＜承章＞ニーヅ発生型新学の誕生例からの示唆：先ず、何故に新学が必要か：Why?

5．「彼等が親しめる様なモード」にしてみる。:「学者は先ず疑うことから始める人種！」

①幾つかの失敗体験例。

（哲学者は実に厳格！　：人工知能学会では「知能の定義」でクレームを頂いた。）

（「情報知識という新しい切り口」という言い方は、此の侭では新規の論理ツールにはなり得ない。「他の何か」という表現と等価であり、ポジティブな視点を示唆する必要がある。勿論、其の場合、創生する側の賛否が分かれましょうが。）

（「情報科学・情報工学以前の課題」という概念も同じく「他の何か」に等しいが、この問題では、更に、問題視しない人々や拒否する専門家の存在が煩雑さを助長。）

②我々は、今までに存在しなかった「新しい科学的ツール・シーヅ」を提供出来るか？

（小生の不勉強の所為では御座いましょうが、残念ながら、現時点では新学を創設せねばならない程、新規、強力なシーヅは見当たらないのではないでしょうか。候補が御座いますれば御教示下さいませ。）

（寧ろ、新シーヅ創出こそ新価値観による新学の目的であるとも言えましょう。）

③それでは、我々は、何を以って新学創成を提唱する根拠とするのでしょうか。

（「強いニーヅ」の故でありましょう。既存の枠組みでの見方、考え方では処理しきれない頂上感、閉塞感、焦燥感、危機感などが学術・研究界、産業界に蔓延している為ではないでしょうか。科学の発展が人類の幸福を約束するとは単純に言えなくなった為ではないでしょうか。否、社会危機を招来した一原因とさえ見なされている程でしょう。）⇒6．①項

（情報化社会であるが故に、取分け、情報科学・情報工学などの関連学術の役割は計り知れないものであります。此の点は「島国の人々」も「国外の人々」も突破口を

希求している所ですから、前記第２①項の情報知識学的ニーヅを世間的ニーヅに適合する様に翻案して、ポジティブな対象領域を提案するのが、シンパシーを得る為の第一歩であると考えました。）

（世間で必要性が叫ばれているもののひとつに、「社会病理の癒し」があります。この面でも情報知識学が果たすべき役割は大きいと期待されます。学問上の理念と、具体的な解決策が検討されるべきでしょう。）⇒６．①項

④今、「科学・工学以前の本質的課題」なるものを「人間の生き方の最も深いレベルから発せられる課題」として捉えて試ることから出発します。

（陳者、人々の生活様式全般に関る課題であり、「世界観・人生観に発する価値観、生活習慣、規範、社会制度、思考様式など全領域における課題」としてみたい。此れは、実は、「文明、文化」と定義されている概念に他ならない。Culture　と Civilization の両者を共に含めようではないかと言う欲張りな提案です。）

＜結＞「データ・知識・情報の本質に係る理論・課題」を『文明・文化』という最も深いレベルから捉えることにしたい。但し、より限定的な「情報文化」・「情報文明」という見方は下部概念として設定したく思っています。如何でしょうか？　　＞⇒２．①項。３項。

（御留意頂き度い点が有ります。今は敢えて哲学・哲学的アプローチと言う道は避けて通ります。理由は、モデル的厳密さ、純粋さが要求され学問に忠実であらねばならないからです。ということは、シンパシーが得難い事に他ならないのです。例えば、平田試案の「情報哲学」の常識的概念は判るような気がしますが、学問的・哲学的定義となると、其れ自体、一個の重要課題になってしまいます。私案では哲学ではなくフィロソフィと言う概念の視座からアプローチしては如何と思っておりますが、本会哲学者メンバーの先生方の御指導を受け度く存じて居る所です。

◎　Philosophy is the product of wonder. (A.N.Whitehead)

Philosophy is not a theory but an activity. (L.Wittgenstein)

又、平田体系試案には「情報文化」という領域が提案されています。御卓見に感服致しますが、愚考致しますに、「情報に関る文化」、「情報の文化的側面」と言う様に修飾語を冠せると、新パラダイムを誕生させる自由度が制限されると共に、「業界」内でのシンパシーが得難くなりそうです。此点が、私案では、前述の如く最も深いレベルでの「文化・文明」を念頭に置いた由来です。この方が基本概念探索の理念幅が拡大され、より革新的なパラダイムや価値観の創設に繋がり、延いては、より多くの方々の検討対象になり得るのではないかと考えるからです。従って、このレベルに立つことにより、新学は初めて「異文明間の衝突を回避し、相互理解に貢献」

することが可能になろうと思われるのです。)

6．「新」情報知識学に寄せる「期待像」

①「新」価値観・「新」学問体系は、少なくとも「全一性」、「現時性」を持つ事が要請されるでしょう。前者は兎も角、後者こそ新学待望の最大の理由であろうかと感じております。現代情報科学・情報技術風景、現代産業風景、現代社会風景に共存する様々な不都合、不合理、危機等を改善すべき使命を託されているのではないでしょうか。即ち、「現」現代科学は「真理探求心駆動型」で良かったかも知れませんが、「新」現代科学は、人類社会破滅回避の為の「使命達成指向型・ミッション　オリエンテッド」であることが、全人類の悲願でありましょう。「社会の安全無くしては、個人の安全無し」は、日々、思い知らされるところです。この部分は科学発展の知識の領域では無く、エイドス：形相：内在する本質的特徴に関する領域の問題であります。我々が研究を進めて行く「動機」に関る領域でもありましょうか。これからの科学が目指さねばならない方向についての　R.Merton 先生提唱の“CUDOS”や J.Ziman 先生提唱の“PLACE”は、我々の新学体系が現時適合性を有する為に如何なる点に、注意すべきであるかを教示して呉れます。情報によって戦争が起こり、平和が齎される時代です。自分や身近な人達の平穏を願う気持ちが出発点ですが、ひとり人類のみならず、生きとし生けるもの全てに対する情報科学の責任を問われて感じがしております。

＜結＞其処で、新体系としては、深いレベルでの倫理性と具体的・行動レベルでの倫理性が望まれていると考えます。このような領域が、学問の「知識の領域」と共に体系付けられる様相こそ、既存科学に見られないものであり、「新学」が必要とされる大きな理由の一つではないかと考えております。勿論、「それは、(従来) 科学の範疇ではない！」という御意見があることでしょう。しかし、この種の討論が出来る場の創設さえもが、新学会に要請されているかに思われます。　＞

◎此点で参考になるのが、医学における「聖ヒポクラテスの誓」、「ニュルンベルク宣言」や「アルマ・マダ宣言」でありましょう。

②新学は専門科学で有り得るか？

(村上陽一郎先生の御主張によれば、科学が成立したのは 19 世紀半ばであるとのことです。其れ以前は如何だったのでしょうか。雑駁をご容赦頂くとすれば、専門・分化する前は「本来の意味で、知ることを愛する行為」であり、総合的学問探求の色彩の濃いものであったのでしょう。呼び名で言えばフィロソフィでしょう。やがて　Natural Philosophy　のようなジャンルが分かれて来たのでしょうか。ここで、注目したいのは、専門科学として確立する前駆として、人間・自然全体に根ざす総

合的検討の学問段階が必要なのではないかと言う点です。)

＜結＞故に、新学は、特に誕生時には、情報専攻を目指すだけでなく、広く奥深い総合的学究が欠かせないものと思われます。
このアプローチを『観論創学』と呼ぶことにします。この段階の姿勢として重要なのは、又もや、「アマチュア精神」であろうと考えております。
「人間存在そのものに根ざす考察」からのみ、『方向を過たない現代科学』が産み出されるのではないでしょうか。19 世紀半ば、欧州文明から、多くの近代科学が誕生した経過は「パラダイムからの創学」の成行きを教えて呉れます。これは、歴史上の出来事としてではなく、現役欧米学者の発想根底にギリシャ・ローマ古典が存在することを思い知らされます。比較して、我の場合、古典は？　日本列島先住民族の人々が風土・生活の中で育んで来られた文化を基盤にして、祖先の方々が、インド文化・中国文化・韓国文化等を吸収し洗練し『縄文心・弥生心・大和心』が醸し出されて来ました。
古典と制限的に言わずに「古典的・伝統的」という曖昧な儚い形で捉えて見たいと思っています。今、気に懸けている方は、個人で言えば、釈尊、智者大師、医師和先生、老子、宣長、世阿弥、芭蕉、仲基などの人々です。
この様な島国環境で育成された「古典的部分」を持つ現代日本文化は、他の世界文明と比較した時、初めて気付かされる特徴も多くあります。それは逆に言えば、孤立的と言われる我が文化をベースにしたパラダイムを持つ「新」情報知識学から、「知識領域」のみならず「深いレベルでの情報観・情報論」を世界に向けて発信すれば、文明相互理解による「世界平和ニーヅ」に応えることが出来る可能性がありましょう。さすれば、官界、マスコミ界、産業界の認知も得られる様に思えます。顔学会は、どうも、そのような雰囲気です。　）＞⇒４．②

③「情報科学・情報工学以前の課題。情報の本質に係る課題」についてのパラダイムを「文明・文化」のレベルで観ると、例えば、どのようなものが考えられるでしょうか。しかも、「アジア文明、日本文化、大和心」から見渡せば、何が持ち出せるか？

＜結＞「本質的課題」（換言すれば、科学以前、或いは、文明・文化レベル議論、情報観、情報論など）の観点から『新価値観』創出を意識的に試みる。
例えば、各位の御報告の前文に『情報知識学論考』として、「何でも自由に」本質的検討を加えて頂くことを奨励してみる。それが、積み上げられて行けば、必ず、其の中から有意義な価値観が定着してくると信じて居ります。
主観的閃きが、厳格な検証を経て、普遍的な観点に成長する為には、多方面

の専門家の方々の「暖かな建設的な協業」が絶対不可欠に思えます。
茲にこそ、新学会の存在意義がある様に感じております。

(注) 今回の報告では、<起章・承章>を中心に問題提起致しました。
説明不充分の部分は、<転章・結章>として改めて報告させて戴きますが、本稿では、今、念頭に在るキーワードを列挙させて頂きますので、次の機会に御審議下さい。
申し上げる迄も御座いませんが、欧米流を否定する立場では御座いません。従来の偉大なる成果に累積して、日本文化から発信して行くつもりであります。しかし、気持ちとしては、バルセローナの聖家族教会を見上げていた時と同じです。

7．結論として、情報知識学構築の為に、幾つか提案させて戴きます。:(キーワード)

◎本質的議論を盛んにする。(「情報知識学論考」を起こす。)
◎思考様式(分析的方法に加えて、総合的判断法の研究…陰陽五行法、医師和先生の方法に注目中。)
(言葉を使わない部分…ウイトゲンシュタインの終点から出発。
ソクラテス以前に注目。不立文字をどう見るか。…文脈の話。)
(阿頼耶識・末那識のこと)
◎伝達様式(「気」の問題)
◎Database (今や、データベースは著しく進歩し、最早、新しい概念で見直されねばならないと感じております。例えば、複雑系としての機能性、機動性、人間と言う概念システム・Liveware との関係などを有機的・発展的に認識する為に、言わば「超データベース」とでも呼べるものを、“Data Complex”と名付けては如何かと、提案申し上げます。)
◎倫理的価値意識(情報科学以前の課題の一つとして、新学の構造に組み込みたいと考えております。新時代の科学は、市民に対するアカウンタビリティを要求されていると思われます。)

8．謝辞

米田幸夫先生、藤原譲先生、岩田修一先生から戴いた学恩に心底より感謝申上げます。
(止観第一研究所：〒511-0902 桑名市松ノ木 7-8-14 Fax 0594-33-0086)
(Samatha Vipasyana Research Observatory: Matsunoki 7-8-14. Kuwana City. Mie. JAPAN. 511-0902)